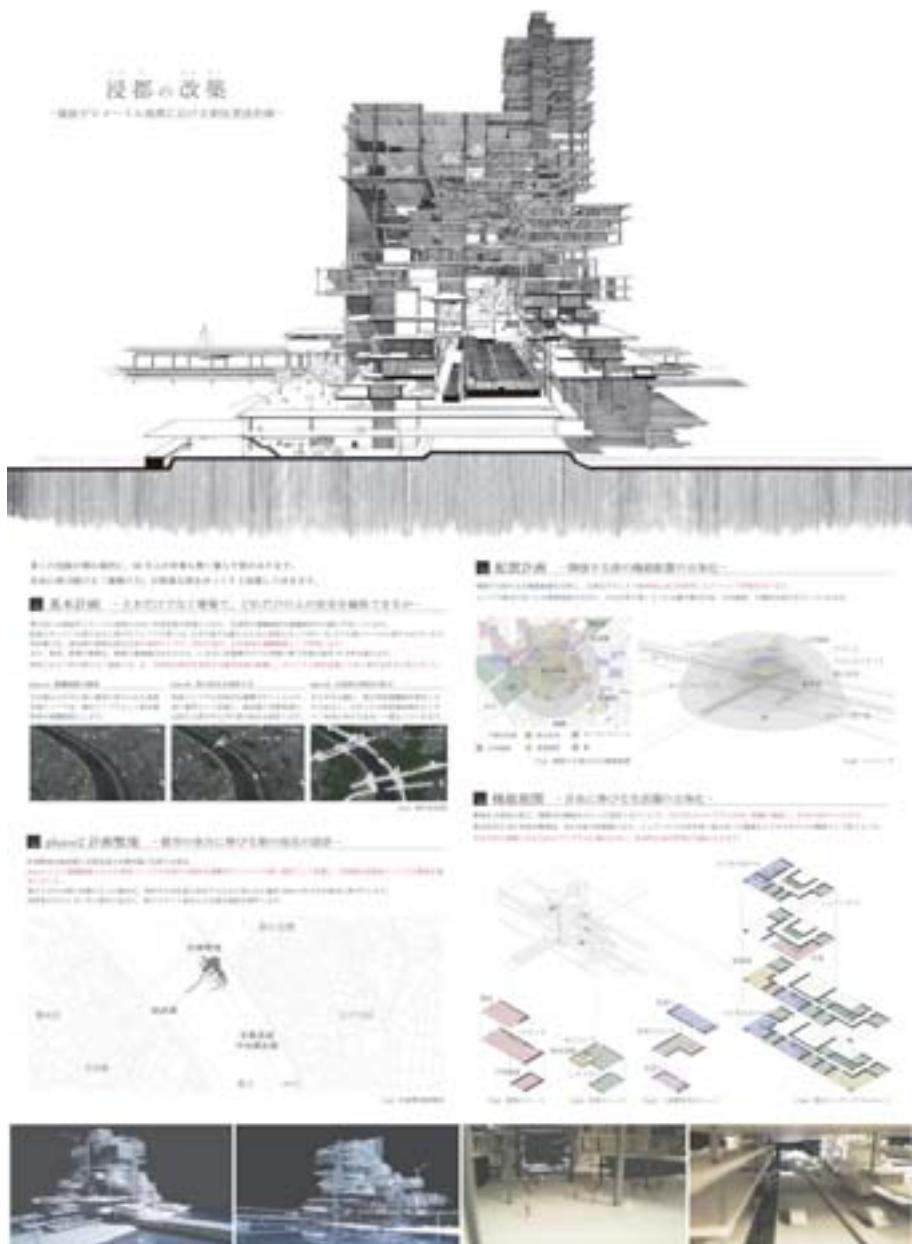


浸都の改築 ー海拔ゼロメートル地帯における街区更改計画ー

特別賞



講評

東京近郊には海面より低いところに住む人々が60万人もいる。だが、対策は後手にまわりスーパー堤防などの整備が完了するには400年もかかるという。作者はこの現実と対策を詳細に調査した上で、危険地域に堤防をつくるというような土木的な手法ではなく、具体的な場を設定、都市の空白と呼ぶ河川と平行して走る首都高速高架を取り込んだ立体的な都市を建築として作り、ゆっくりと都市を改築していくという壮大な提案を練り上げた。その都市（建築）は高架をまたぎ、様々な施設を含有しつつ、水平垂直に成長する。

精緻で迫力のある模型と巨匠達が未来を描いていた時代を思い起こさせるようなペンによる透視図など、巧みなプレゼンには懐かしいものを感じさせノスタルジックさえある。

建築の制限される場に接地性の希薄なこれだけの構造物が建つことを想像するとそれはそれで様々な問題はある。しかし、危険な低地に住む多くの人々を建築でなんとか救えたらという問題意識、建築に未来を投影し大きなテーマにひるむことなく、巧みな構成で具現化した非凡な才能にエールを送りたい。

(審査委員：神成 健)

涌井 匠
(わくい たくみ)

日本大学
理工学部
海洋建築工学科



60万人が海面よりも低い地域に暮らす東京近郊の海拔ゼロメートル地帯。この居住人口は世界的に見ても特筆すべき数字である。浸水被害等による甚大な被害が想定され、そこで暮らすためには門や堤防・排水機場が必要となる。

問題を多く抱える地域に対して政府の提唱した「スーパー堤防」という街を一新する計画は、完成までに400年の歳月を要し、現在は事業仕分けによって廃止されている。

本計画では、低地の地形図と建物倒壊危険度を足しあわせ、危険度の高い地域を選定し、都市の余白を利用してことで、元の街と共に新たな街区を形成する。

需要に応じて伸び続ける「建築の力」を、立体的な街区を形成する都市計画に転換し、ゆっくりと街を改築してゆく。

